「赤水図」の作り方　1 情報収集

文献で調べる

当時の百科事典や天文学の本などを参考にして地図を製作していた。

〈例〉
- 倭節用悉改袋
- 天文瓊統
- 天経或問

地図を参考にする

正保期の日本図・国絵図・各種絵図を参考にしている。彰考館（水戸藩が日本の通史である『大日本史』を編纂するために作らせた史局）に保管されていた資料も参考にしたと思われる。

資料を集める

一緒に学んだ仲間や、地図製作に賛同してくれる人々など幅広い人脈を活用して、全国の地図を集めた。

主な協力者

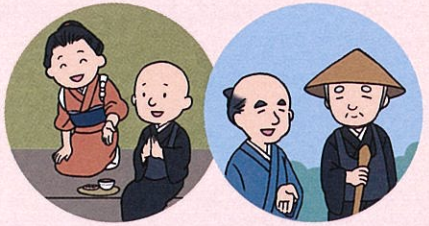
- 柴田平蔵（豪農）
- 古川古松軒（地理学者）
- 立原蘭渓（儒学者）
- 高山彦九郎（武士）
- 立原翠軒（儒学者）
- 木村兼葭堂（収集家）
- 頼春水（儒学者）
- 須原屋伊八（版元）
- 頼山陽（儒学者）

資料を写しとる

貴重な地図や資料などは赤水自身が写しとり、地図製作の参考にした。京都では禁書である『職方外紀』（世界地理書）をひそかに転写している。

検証の旅に出る

赤水は44歳の時に、製作途中の地図の精度を確かめるために東北の旅に出た。『奥の細道』にならい、仙台・鶴岡・新潟・郡山を経由して、赤浜へ戻ってきた。

人に聞く

赤浜の家の前を通りかかった旅人をもてなし、どのような経路を通ってきたか、街道は険しいか否か、幅員・高低・山野・河川・水脈・地名・宿場・温泉・神社仏閣などの情報を聞いたり、その地域の情報が載った書物を見せてもらったりすることで、地理情報を手に入れた。
また、江戸在住時は多くの学者が赤水のもとを訪ねて有益な情報をもたらした。